Title	祈りによる共同体形成 ： 植村正久の理解を中心として
Author(s)	松本，周
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume29， 2015.3：145-157
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5509
Rights	

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

祈りによる共同体形成

――植村正久の理解を中心として

松本　周

はじめに

二一世紀の教会は共同体形成にどのようにして奉仕するのか、また日本基督教団を伝道的にどのように形成するのか、これらの点について植村正久の「祈り」に関する諸著作から学びつつ、「志」の喪失、『霊性の危機』の問題、そして同時代意識と伝道者たちの同志的結合への道筋を確認していきたいと考えています。

一　聖霊を受けて伝道する

上述した私たちの問題意識にいわば直截に呼応する、「日本伝道論」と題する植村の文章があります。

余輩が今日本に伝道せんとするにあたり、霊なる賜を上帝より受くるの切要なること既にかくのごとし、蓋

し吾人は天性霊なる才力をもって世に生まれたる者なり。これをもってするときは能く神霊の事を悟り、能く心霊の事を愛し、また能く人の霊なる才能を動かして、すでにわが感じたるところを感ぜしむることを得べし。ドイツのネアンダー曰く、神の霊（プニューマ）は人の霊（プニューマ）に符合せり。人の霊は神の化育を受けてこれを人性の全部に推し広むるに適し、且つかくのごとくならんために預定せられたるなりと。[1]

伝道にあたって、神からの霊の賜物を受けること「切要」である。神の霊が、人の霊を捉えることにおいて、伝道が実現することを植村は語ります。この背景には後述する、植村自身の原体験ともいえる出来事があります。それまでキリスト教信仰者が皆無であった地に最初の信仰者が起こされるとはどういう出来事か、教会の無い地に教会が最初に立てられることはどうしたら生じるのか。

しばしば引用される次の文章には、その次第が記されています。

明治五年正月（旧暦）バラ氏に乞うて、西洋人のなすがごとく、初週の祈祷会を開けり。これ日本国において、祈祷会を催すの初めなり。これを開くの日、バラ氏はいかなることを感じたりけん、壁上の黒板にイザヤ三十二章十五節の一句を取り、聖霊のそそがるる云々の文字を記し、使徒行伝を開講し、最も熱心にペンテコステの章を説明せり。会する者およそ三十名、今まで祈祷の声を発することなかりし甲祈り、乙これに次ぎ、或いは泣き、或いは叫びて祈りするもの互いに前後を争うがごとくにてありき、バラ氏は予て伝え聞きたるリバイバルのことを羨み、親しくその時節に遇うこともがなと希望せしことのなきにあらざりしが、面りに一大リバイバルを見たる心地せりという。蓋し未だバプテスマも受けしことなく、公然祈りをなせしことなく、そ

の間際まではいかなる宗教思想を抱きつつあるやを知らざりし数名の少年が、俄然自ら希望してかかる有様に立ち至りしものなるをもって、その驚愕一方ならず。[2]

植村は聖霊を受けることによって「祈り」が生起し、教会が誕生したことを証言しています。祈りにおいて「神の霊（プニューマ）は人の霊（プニューマ）に符合」します。こうした植村の理解にしたがえば、「霊性の危機」とは「祈りの喪失」であると言い換えることができますし、また「祈りの復興」により神の霊が人の霊を捉え、教会が誕生するすなわち伝道が推進する、とまとめることができます。伝道とは聖霊によって人の内に祈りが引き起こされ、信仰者が創造され、教会が生まれる出来事なのです。

二　キリスト教的祈りの特質

植村はキリスト教の「祈り」が、日本にそれ以前からある他宗教の「祈願」とは異なることを明確に理解していました。キリスト教の祈りの特質は、①神との人格的関係、②神人関係から世界政策への展開、この二つにまとめられます。[3]

「キリスト教の神は祈るものを求む。祈りを聴かるる人格的の神である。儒教とキリスト教とは全く神の観念において相違して居る」。[4] これが植村における祈り理解です。人格関係が崩れると「甲の極端は人をして、余りに甚だしく神に服従せしめ、乙の極端は、神をして全く人の祈りに服従せしめんと欲す」[5]ということになります。前者は神による人間の非人格化であり、後者は人間による神の道具化によって人格関係が喪失されます。また次のよう

にも述べます。「神は霊なれば之を拝するものも霊と眞とを以てせねばならぬ。霊を以てとは神は人格であるから之を人格的に取り扱はねばならぬことを意味す。宗教は霊性と霊性との関係である。心と心との契合である。巫呪(ふじゅ)幻術の如く、決して機械的の手段を以て行はるるもので無い。精神的に為さねばならぬ。徒に一心不乱凝り固まりたればとて礼拝にはならぬ[6]」。神または人間が、相互に対象を「機械的の手段を以て」すなわち非人格的に取り扱うことが否定されます。さらには「妖術的祈祷と称するものあり。これは祈りをもってあたかも一つの魔法のごとく看做し、機械的に利益を収め得べしとなすの迷信なり。或るキリスト教徒はこの迷信に溺れ居るなり[7]。」願望成就の道具に堕し、人格交流の存しない祈りを植村は断固拒否します。

人格的関係[8]における祈りとは「人の霊魂が現に在す神と談話すること[9]」であり、「心の誠表面に現はれて祈りとはなる。即ち齋(い)み宣(の)るの義、神に向かひて信仰的の談話を試ることである。霊なる生命発露して、神と思ひを交へ、情感を通はせ志を述ぶるが祈りである。独語するのでは無い。余念なく会話するにある[10]」とされます。「わが胸中に理会せざる所あれば、これをその道に堪能なる人に問う。わが徳到らざる所あり、過ちを改むること困難なる時は、これを先覚の君子に訴えて助けを乞うことなり。人間のことにして、かくのごとくならば、これと同様なる感化、神と人との間に起るまじき理あるべからず[11]」。したがって祈りは、神の決定に人間が黙従することでも、人間による神操縦でもなく霊的「談話」を通じ、神の意志に人間が「感化」され、人間が神の意志を「理会」すべきことと主張されます。植村は祈りにおける相互対話、人格関係を強調します。

次に祈りによる世界政策について、植村の述べるところを観ます。

聖国を来たらせたまえ。聖名を崇めさせたまえ、聖慮の天に行わるるごとく地にもおこなわれしめたまえと。

キリスト教徒の祈りはかくのごとく大いなる事を企図し、雄偉高尚なる計画に同情を表し、神と共に働きてこの目的を達せんことを望むものなり。その事すでに偉なり。これを思い、これがために喜び、或いはこれがために概して、意衷を神に聞こえ、切にその助けを乞う。天下の快事何ものかこれに勝らん。この祈りは宇宙の一勢力となりて非常なる効用をなすなり。またそのうちに発表せられたる大思想は人類の教育となりて非常なる力あるものなり。[12]

ここにおいて祈りは、被造世界全体に対する神の意図を、人格的対話を通して人間が聞きとり、その実現のために世界へと働きかけていく、一大事業として捉えられています。祈りの有する、壮大な宇宙論的展望をふまえて、植村は「祈りは世界の大法なり」[13]と語るのです。全宇宙を対象とする、神の救済意志が祈りのうちに示されるからです。

神の救済意志と、人間の意図・意志の一致こそ、植村における「志」概念の根本です。「志を遜（へりくだ）るとは、其の心を卑遜にして、有りと雖（いえど）も未だ有らざるが如くするのである。自ら未成品たることを意識し、其の積りで万事を計画し、少しも現状に安んずる所がない。所謂謙虚益を受くるのである」[14]。ここでは救済史上の中間時にある人間という自己理解が明確に表現されています。神の救済目的を人は完全には把握し得ないが故に、祈りによって聖旨を求め、また自らの中間時的な未成性を自覚するとき「謙虚」という信仰的徳性が涵養されます。

なお植村の「志」については、それを思想史的観点から理解して、彼の旗本としての出自や武士道論と接続させる議論がありますが[15]、祈りについて述べる植村の文章で「志」が語られるときには、神の志＝御心を人間が知り、生きるという意味が込められています。「キリスト者の祈りにはこの志を立つるということが最も重要な点である。

讃美、感謝、懺悔、謝罪皆志を興すまでに徹底して至らねば役に立たぬ。要するに粛しみて神の志を観、何事もこれに従わんと欲するが祈りの本旨である」[16]というようにです。また「悔改めは立志発心の意味にて……已往の生活の浅ましく罪悪に満ちたるを思い、ここに意を決して神に行かんとする向上心なり。神の子たるの位置を確かにし、これを実現せんと志す」[17]、「わが志すところ神の意志にあらざるを覚らば、惜し気もなく断じてこれを捨つ。……祈りはキリスト者が神によりて志を磨き、その同志となりて、進退するの機関である」[18]とも述べています。このように「志」とは、祈りを通して人間の意志が神の意志に合致させられるところに現れるのです。

したがって現代において、植村の説いた「志」を回復し、伝道者の同志的結合を目指す際、なによりも「祈りにおいて神の志を得心する」という姿勢が求められます。自らの力では志を一つに集めること適わない者たちです。そこに私たちの罪の姿が現れています。しかし植村が述べるように、「悔改めは立志発心」であり「意を決して神に行かんとする向上心」を与えられ、「神の子たるの位置を確かにし、これを実現せんと志す」ことは祈りによって導かれます。

祈りにより神と志を同じくされた同志として立ち、神の志を我らが志とする集団として、伝道者がこの時代に結集されていくことを願います。「我が身我が家のことを始めとし、人のこと国の有様世界の出来事など総てに就きて神の意旨如何ん其の期待せらるること喜ばるること好ませられざること如何んと深く思ひ廻らすならば、自ら聖霊の言ひ難き祈りにも参り、歓喜、憂苦、希望、切なる願ひ、天に達するの向上心、世界を包容するの志など心胸に溢れ来りて祈りは潔き泉の岩の下より迸り出る」[19]との経験を共に積み重ねたく願っています。この祈りの同志集団が聖霊に導かれつつ、新教会建設すなわち伝道政策と、世界を包容する宣教政策との志を与えられていきたいと思うのです。

三　遣わされた場において

植村の著作を通し、祈りの必要性と重要性を確認させられました。このことが教会的な実践とどのように結びついていくのかということになります。そこで、遣わされた場での祈りの生活について、課題について、述べさせていただきます。

兼務担任教師として遣わされている上尾使徒教会は、創立記念日がペンテコステと定められています。上尾使徒教会として最初の礼拝を守ったのが一九七〇年の聖霊降臨日であったことに由来し、毎年の移動祝日として創立記念日を祝います。このことをさらに日本最初のプロテスタント教会成立の出来事、また「使徒行伝」に名称が由来する教会として、祈りによって立てられる教会であることを確認しつつ歩んでいます。毎月一回、礼拝後ただちに（誰も席を立つことなく）行われる信仰問答祈祷会では、「今まで祈祷の声を発することなかりし甲祈り、乙これに次ぎ」との出来事を追体験しています。その中で、主のご計画を見上げ、その実現に心躍らせる信仰が形造られていきます。

上尾使徒教会と聖学院教会とは同じ上尾市内に立地する教会として、一〇年以上にわたり合同研修会を積み重ねてきました。当初は両教会牧師間の信頼関係から出発しましたが、両教会の牧師交代を経てなお関係を継続発展させてきました。三年前からは伝道協力・協力伝道の実りとして、東京神学大学の夏期伝道実習プログラムを共同で実施しています。旧教派的伝統を異にしつつも両教会が志を同じくして歩めるのは、「教団信仰告白」による一致が、祈りを通じて生きた同志的結合へと導かれている故です。さらにそれは、両教会が密接に関わりを有するキリ

スト教学校、学校法人聖学院への執り成しの祈りともなっています。「聖学院大学の理念」第四条には次のようにあります。

本大学は、日本におけるプロテスタント・キリスト教の伝統及びその信仰的、文化的、教育的貢献に連なるとともに、その労苦と苦心の経験に虚心に学び、その信仰、文化、教育活動の新しい進展のために努力し、日本社会に対し新たな指標を打ち立てようとする。そのため、福音的プロテスタント諸教会の協力を仰ぐとともに、とりわけ、かつての聖学院神学校が合流している東京神学大学との協力関係を密にする。また、広く内外のプロテスタント諸大学と相互協力の関係も樹立する。

この条項を教会の側から捉え返せば、キリスト教大学が信仰に固く立ち「日本社会に対し新たな指標を打ち立て」る使命を担えるように祈るということになります。

教会は必須の祈祷課題として、地域のキリスト教学校のために祈っていただきたいと思います。[20] 二〇一三年の聖学院大学クリスマス礼拝説教者に、韓国・長老会神学大学校総長の金明容先生をお迎えしました。その際に印象的なことを語られました。「聖学院大学のチャペルは、他と違う雰囲気に包まれている。礼拝堂全体が、深い祈りに満たされた空間となっていることを感じた」とのことでした。このご発言を聞いて私が思いましたことは、聖学院大学チャペルが、聖学院教会の主日礼拝の場でもあることの意義深さでした。教会の祈りが大学を霊的に支えている事実を、金総長は実に的確な言葉で示してくださいました。[21]

祈る共同体を通して新しい現実が生み出されていく。これらの経験を通して、祈る共同体の形成は私の周囲にお

いて同労者や次世代にと拡がっていきました。

同じ地域に、具体的には同じ教区に遣わされている、同世代の伝道者が集まり「関東伝道を祈る会」が始まりました。共に礼拝し、各々の教会の状況を報告して祈り合い、そして学びの時を持っています。このような仲間が与えられたことを心から感謝しています。

また教会青年が集う「アジア宣教を祈る会」に参加しています。現在のところ年六回のペースで平日夜に、都内諸教会を会場として開催されています。会の趣旨には「アジアにおける教会交流、キリスト教団体の活動は既に数多くある。キリスト教史研究など学術的な会も持たれている。そのような中で、この会のビジョンが与えられたのは、より日常的な営みとしてアジア宣教を覚えて祈り、神の国を共に目指す、教会的な交わりをと願ったことから。そして、ここに集うことを通して新たなつながりが与えられ、また各々の活動の情報交換もなされていけばと願っている」とあります。「祈る会」として何よりも祈りが会の中心にあることを心強く、嬉しく思っています。驚かされたのは一日の仕事を終えてから、祈るために教会青年が一生懸命集まってくるという事実でした。そして祈りを合わせた後で輝いた表情になって、ある参加者は一時間以上かかる帰路へ着きます。各教会の祈祷会には時間が合わなかったり、他の世代の参加者と話が合わなかったりで、なかなか参加に至っていない青年たちも、祈りへの求めは深く切実にあることを知りました。

日常生活の中に祈りがある。祈りの日常性ということは韓国・セムナン教会と長老会神学大学校との交流から、私が最も教えられたことでした。ご存知のように教派を問わずほとんどの韓国の教会では「早天祈祷会」が持たれています。これは吉善宙（キル・ソンジュ）牧師により平壌で始められ、それが一九〇七年リバイバルの出発点になりました。そして平壌は「東洋のエルサレム」と称されるほど教会と神学校の集まるキリスト教会の中心地になっ

たのです。そして現代の韓国青年もよく祈ります。長神大キャンパスでも学生の二、三人が集まって談笑していると思うと、次にはそのまま互いの課題を覚えて祈り合っています。こうした日常的な祈りの姿が、信仰生活の原動力であることをあらためて覚えます。そして先述したように、日本の教会青年もそのような機会を真摯に求めているのです。

ここまで述べてきてご理解いただけると思いますが、「祈りの復興＝リバイバル」を訴えることは、反神学的であること、非理性的であることを意味しません。[22] また昨今「霊性」「スピリチュアリティ」ということは教会の中でも外でも盛んに言われますが、教会がその問題を考えるときにはまず、植村祈祷論の筋道に沿って、祈りによる霊性の回復が目指されるべきでありましょう。締め括りに植村の一文を引用します。

> 数年衰え居たる祈り会の振起せんこそ望ましけれ。これ教会の元気を養う所、両三人集まれば我も必ずともに集まらんと仰せられたる主の恩恵優渥なる所、兄弟姉妹が信仰の経験を交換し、相親しみて一致協力するの精神を振作する所なり。ゆえにその盛衰は教会の有様に最も大いなる関係を有すると言うを俟たず。その浮沈をもって教会の精神上における冷熱を計るべしとするほどの関係あり。[23]

二一世紀の日本と世界に共同体を建設していくうえで、今一度、植村が語るような仕方での祈りの復興をもって始めたいと願います。ご清聴ありがとうございました。

（本稿は、第三七回教団21研修フォーラム［二〇一五年一月二六日、於：鳥居坂教会］での発表を基にし、改題

と加筆修正を施したものである。）

注

（1）植村正久「日本伝道論」明治一六年『植村正久著作集6』新教出版社、一九六七年、三七四頁。

（2）植村「日本帝国最首のプロテスタント教会」明治二十五年『著作集6』、七三―七四頁。引用文中のイザヤ書三二章一五節には「ついに、我々の上に／霊が高い天から注がれる。荒れ野は園となり／園は森と見なされる。」（新共同訳）と記されている。

（3）こうした「祈り」理解に、P・T・フォーサイスのそれとの相似を観ることもできる。『祈りのこころ』はフォーサイスの信仰と思想を最も雄渾に述べたものである。……神と人との人格的な交わりとしての祈りからはじまる。人格関係を強調すると自分に重点が置かれて主観的になりやすいが、フォーサイスは「神と人間との出会い」から、その出会いの場としての歴史へと視野を広げ、「祈りの世界」が雄大に展開するのである。」（ピーター・テイラー・フォーサイス『祈りのこころ』大宮溥訳、一麦出版社、二〇〇八年、「訳者あとがき」一七七―一七八頁。）

（4）植村正久「神の弁」大正五年『植村正久著作集5』新教出版社、一九六六年、二一七頁。

（5）植村正久「キリスト教徒の祈り」明治二十六年『著作集5』、二五三頁。

（6）植村正久『祈の生活』丁未出版社、大正十三年六版（初版・大正八年）、一四〇頁。

（7）植村「キリスト教徒の祈り」『著作集5』、二五一頁。

（8）「人格関係」とは何か。様々な定義が可能であろうが、この文脈においては、決して自己の思い通りにならない他者と向かい合う関係、という点の確認が重要である。

（9）植村「キリスト教徒の祈り」『著作集5』、二四三頁。

（10）植村『祈りの生活』、一七〇―一七一頁。

（11）植村「キリスト教徒の祈り」『著作集5』、二四九頁。

(12) 植村「キリスト教徒の祈り」『著作集5』、二四八頁。
(13) 植村正久『霊性の危機』昭和二三年、警醒社書店、一一三頁。
(14) 植村『祈りの生活』、二四頁。
(15) 植村の信仰思想を理解するにあたって、最初に「志」に注目したのは石原謙であり、「志の宗教」と植村を評している（石原謙「志の宗教」『石原謙著作集第十巻』岩波書店、一九七九年、四四一―四四九頁。一九三二年の『植村全集』出版記念会における講演である）。そして植村が信仰を志と換言した点に、日本人初代キリスト者としての日本伝統に対する態度を見、「我々に附与された志、日本的精神、それが基督教により拒まれずに、却て、その中に信仰が伸び育つところの地盤を見出す」さらには「我々が基督を知る以前に、既に神は日本人を顧みて其の心に「志」の力を与へられた」（石原、同上書、四四五頁）と述べる。そこでは、非キリスト教的な日本精神文化の伝統が、キリスト教信仰との関係において否定的にではなく、肯定的に受容される筋道が考えられている。
(16) 植村「志と信仰」（大正八）『植村正久著作集1』新教出版社、一九六六年、一九四頁。
(17) 植村「求道者の決心を促す」（明治四一）『著作集6』、二七二頁。
(18) 植村「志と信仰」『著作集1』、一九四頁。
(19) 植村『祈りの生活』、一五四頁。
(20) このことで感銘を受けたのは、北陸学院と石川県諸教会との関係です。石川地区の祈祷日課の中で「北陸学院のために祈る主日」が定められており、その日には学院長から諸教会宛に書簡が送られます。「教会のみなさまには、日頃より祈りの支援をいただいていることを感謝します。今後も北陸学院が主イエス・キリストに忠実に歩むことができますよう祈って支えてくださるよう、お願い申し上げます。教会と学校が結び合わされ、愛するこの北陸の地に、主のご栄光がいよいよ豊かにあらわされますようにと祈っています」。二〇一三年、ちょうど石川県のある教会に出席させていただいた日が、北陸学院のために祈る主日でした。礼拝後この書簡が朗読され、祈りのときが持たれ、当日の礼拝席上献金が北陸学院へ送られました。
(21) なお「聖学院大学の理念」第二条には次のように定められている。「本大学は、プロテスタント・キリスト教の伝統に即してなされる礼拝を生命的な源泉とする。礼拝においては、聖書と宗教改革者が証する福音が語られ、そこから

大学共同体にとっての生命である研究と教育のための自由と責任、および伝道への活力、さらに本大学の伝統を継承し新たに創造する喜びと熱意とが与えられる」。学期中の火曜から金曜に行われる全学礼拝もチャペルで行われている。

(22) むしろリバイバルの最中においてこそ、それが神的賜物であって、人間の所有物でないことへの神学的反省は肝要であると考える。「ポロポロを受ける、と言う。しかし、受けるだけで、持っちゃいけない。いけないというより、ポロポロは持てないのだ。持ったとたん、ポロポロは死に、ポロポロでなくなってしまう。」（田中小実昌『ポロポロ』河出書房新社、二〇〇四年、二七頁）参照。ここでの「ポロポロ」とは聖霊による賜物の一つを指している。

(23) 植村「いのり会」明治二十九年『著作集6』、三〇九頁。